

第二章 各種選挙

政治変えた無党派層

知事選で多党相乗り

平成七年四月の第十三回統一地方選挙は、全国的に組織主導という従来の選挙パターンとは様変わりしたものであった。

その典型が無党派層の動向だった。十三都府県で行われた知事選挙のうち東京都知事選では、タレント候補の青島幸男氏が自民や社会、さががけ、公明などが推薦・支持する元自治事務次官の石原信雄氏らを抑えて初当選。大阪府知事選でも、横山ノック氏が自民、新進、社会、新党さががけ、公明の五党相乗り候補を破った。また、新人三人が立候補した高松市長選では、自民と共産推薦の候補者と、新進と社会、新党さががけが推す候補者が激突するという異例の対決構図が注目された。

香川を含む四十三道府県議会の議員選挙では、自民党公認候補の当選者は一千三百四人（前回比百九十七人減）、社会党二百八十二人（同五十一人減）と既成二大政党は惨敗、新たな受け皿として新進が百四十議席と躍進し、同年七月の参議院通常選挙では自社さ連立内閣が大敗を喫した。

無党派層が、日本の政治を動かした背景については諸説ある。自民党の金権体質と、護憲を旗印にした社会が連立内閣参画で政策を百八十度転換したことに對する戸惑いに加え、合従連衡を繰り返す中央政界の混迷とねじれに對する国民の強い不信感の表れと指摘する識

者も多い。

十一年四月の第十四回統一地方選挙も、全国的な流れは前回と似通っていた。前回選挙で無党派層の支持を受けて青島幸男氏が当選した東京都知事選では立候補者十九人すべてが無所属で出馬、無党派層を意識した選挙戦が繰り広げられ、運輸相や環境庁長官を務めた石原慎太郎氏が、自民の推薦候補や国際政治学者の舛添洋一氏らの有力候補を退け都知事ポストに就いた。また、北海道、鳥取など八道県では、現職、新人を問わず多党相乗り候補が知事ポストを射止めた。香川など四十四道府県議会の議員選挙（定数二千六百九十九）では、前回躍進の新進が解党して創設された民主が百七十議席を確保したほか、自民は微減だったが、連立政権に加わる社民、新党さきがけは大敗を喫した。

第一節 県議会議員選挙

投票率、ワースト大幅更新

五選挙区で八人が無投票

【第十三回県議会議員選挙】 七年四月の香川県議会議員選挙（定数四十五）に立候補したのは、党派別で自民三十三人、新進三人、社会七人、共産三人、公明三人、無所属十人の計五十九人となり、前回選挙より二人減少した。二十二人が出馬した新人は男女十人が当選、新旧交代の色合いの濃い選挙戦となった。また、三豊郡第一選挙区など五選挙区で八人が無投票当選した。今回の平均投票率は五七・四％、史上最低だった前回選挙（六五・一八％）を下回り、ワースト記録を

大幅に更新、政治離れが一段と加速した。

党派別当選者のうち自民は三十一人で改選前より二人減だったが、当選した無所属新人に保守系二人が含まれており、現有議席を維持。社会、公明も現有議席を確保し勢力分野に大きな変動はなかった。共産は一減、初めて公認、推薦候補者を擁立した新進が二議席を射止めた。

党派別得票率は、自民六〇・九九％（前回五八・一三％）、社会一一・三七％（同一二・三八％）、公明六・五五％（同四・三一％）、共産三・一九％（同二・九二％）、新進は三・三四％だった。また、自民現職の大西末廣氏（綾歌郡選挙区）、溝渕 博氏（高松市選挙区）が九期連続当選を果たし、前田敬二氏（三豊郡第一選挙区）の最多当選回数に並んだ。

選挙戦となった高松市選挙区など十選挙区では、無党派層を意識して各候補者とも政党色を薄め、福祉や教育、社会基盤の整備などを柱に支持を訴えた。

主要政党が出そろった高松市選挙区（定数十四）には、現職十人、元職一人、新人六人が立候補した。社会は、高松市長選に出馬した藤本哲夫氏の後任として元職一人と現職一人に絞り込んで二議席死守を目指したが、元職は返り咲きを果たせず、現職一人の当選にとどまった。新進公認で出馬した岡野史生氏は、新党ブームに乗って追い上げたが惜敗。自民は、議長経験者を含む公認候補者八人が危なげなく当選した。また、無所属新人の渡辺智子氏が、都市部と同様に無党派層の後押しで新風を吹き込み、共産公認で再選を果たした藤目千代子氏と合わせて三十六年ぶりに女性県議二人が誕生した。

前回の無投票から一転して少数激戦となった大川郡選挙区(定数五)は現職四人が強さを発揮するとともに、自民新人の名和基延氏が地元を固めて初当選を果たした。丸亀市選挙区では、自民公認の三候補がそろって当選、保守独占は揺るぎなかった。坂出市選挙区(定数三)も自民が議席を独占。自民、社会、新進の三つともえとなった普通寺市選挙区(定数二)は、辻村 衛氏(自現)がトップ当選、櫛田治夫氏(社新)が新進推薦の無所属新人を振り切り、二度目の挑戦で議席をつかんだ。

二期連続無投票だった綾歌郡選挙区(定数三)は、八年ぶりの選挙戦。現職二人、新人三人が出馬して混戦もようとなったが、自民現職の大西末廣氏が八期三十二年の強みを発揮してトップ当選、勇退した仲西秀信議員の後継として出馬した水本勝規氏(自新)が続き、三番手には亀井 広氏(社現)が新進推薦の新人に約千票差をつけて逃げ切った。観音寺市選挙区(定数二)は、白川晴司氏の首長選への転身を受けて出馬した石川 豊氏(無新)が、新進党の推薦候補として幅広い支持を集めて初当選を果たした。

保守系同士の争いとなったのは二選挙区。仲多度郡第一選挙区は、五所野尾恭一氏(無新)が二度目の挑戦で自民現職の一面を崩してトップ当選、自民公認三候補者の争いとなった小豆郡選挙区は、黒島 啓氏(自新)が前回選挙のリベンジを果たした。

香川県議会議員選挙

平成 7 年 4 月 9 日執行 (○の数字は当選回数)

(高松市選挙区＝定数 14、候補者 17)

当	11,112 票	木村嘉己	(65)	自民	現	屋島東町	⑧
当	10,658 票	宮本欣貞	(39)	自民	新	西植田町	①
当	9,468 票	高岡哲夫	(69)	自民	現	鬼無町	⑤
当	8,437 票	溝渕博	(65)	自民	現	常磐町	⑨
当	8,157 票	寒川泰博	(56)	公明	現	鶴市町	②
当	8,047 票	大須賀規祐	(55)	公明	現	屋島西町	③
当	7,656 票	平木享	(47)	自民	新	仏生山町	①
当	7,438 票	植田郁男	(63)	自民	現	田村町	⑤
当	7,073 票	原内保	(52)	無所属	新	扇町	①
当	7,046 票	渡辺智子	(41)	無所属	新	多肥上町	①
当	7,043 票	松本康範	(48)	自民	現	一宮町	②
当	6,837 票	鎌田守恭	(46)	自民	現	栗林町	②
当	6,790 票	藤村目千代	(46)	共産	現	檀紙町	②
当	6,375 票	村上豊	(49)	社会	現	塩上町	②
	6,253 票	岡野史	(32)	新進	新	鍛冶屋町	
	6,227 票	澁川正	(54)	社会	元	宮脇町	
	1,096 票	藤田健二	(57)	無所属	新	鶴市町	

各種選挙（県議会議員選挙）

（丸亀市選挙区＝定数 3、候補者 4）

当	8,804 票	山 内 俊 夫	(48)	自 民 現	城 東 町	②
当	7,931 票	山 本 直 樹	(47)	自 民 現	新 浜 町	③
当	7,708 票	塚 本 修	(54)	自 民 現	金 倉 町	②
	6,968 票	梶 正 治	(42)	社 会 新	山 北 町	

（坂出市選挙区＝定数 3、候補者 4）

当	8,349 票	谷 川 実	(57)	自 民 現	宇多津町	⑥
当	6,972 票	池 田 長 義	(65)	自 民 現	林 田 町	⑤
当	5,939 票	尾 崎 道 広	(49)	自 民 現	富士見町	②
	1,084 票	三 宅 栄	(60)	無所属 新	青 海 町	

（善通寺市選挙区＝定数 2、候補者 3）

当	6,955 票	辻 村 衛	(62)	自 民 現	上吉田町	⑤
当	6,750 票	櫛 田 治 夫	(63)	社 会 新	弘 田 町	①
	5,310 票	吉 田 康 宏	(52)	無所属 新	上吉田町	

（観音寺市選挙区＝定数 2、候補者 3）

当	7,761 票	岸 上 修	(69)	自 民 現	柞 田 町	④
当	7,401 票	石 川 豊	(53)	無所属 新	吉 岡 町	①
	1,420 票	高 嶋 明 雄	(60)	共 産 新	琴 浪 町	

（大川郡選挙区＝定数 5、候補者 7）

当	10,274 票	真 部 善 美	(73)	自 民 現	長 尾 町	④
当	10,242 票	名 和 基 延	(54)	自 民 新	津 田 町	①
当	9,690 票	白 井 昌 幸	(57)	自 民 現	志 度 町	③
当	8,229 票	砂 川 保	(51)	社 会 現	大 内 町	④
当	7,800 票	富 田 博 昭	(58)	公 明 現	大 内 町	②
	6,160 票	檜 村 正 員	(65)	無所属 新	志 度 町	
	3,486 票	八 田 良 一	(65)	共 産 新	大 内 町	

（小豆郡選挙区＝定数 2、候補者 3）

当	9,287 票	岡 田 好 平	(60)	自 民 現	土 庄 町	⑤
当	8,554 票	黒 島 啓	(53)	自 民 新	内 海 町	①
	6,163 票	近 本 幸 三	(49)	自 民 新	内 海 町	

(香川郡選挙区=定数1、候補者2)

当	9,065 票	綾田福雄	(48)	自民現	香南町	④
	5,679 票	西川勝秀	(43)	無所属新	香川町	

(綾歌郡選挙区=定数3、候補者5)

当	8,864 票	大西末廣	(64)	自民現	飯山町	⑨
当	8,491 票	水本勝規	(45)	自民新	綾南町	①
当	7,130 票	亀井 広	(61)	社会現	国分寺町	④
	5,976 票	大山一郎	(35)	新進新	国分寺町	
	4,846 票	西岡章夫	(54)	無所属新	綾上町	

(仲多度郡第一選挙区=定数2、候補者3)

当	7,663 票	五所野尾恭一	(49)	無所属新	満濃町	①
当	7,422 票	都村忠弘	(59)	自民現	琴平町	⑥
	6,380 票	栗田隆義	(41)	自民現	満濃町	

<無投票当選>

(木田郡第一選挙区=定数1)

筒井敏行	(52)	自民現	三木町	②
------	------	-----	-----	---

(木田郡第二選挙区=定数1)

大西邦美	(45)	新進現	牟礼町	⑤
------	------	-----	-----	---

(仲多度郡第二選挙区=定数1)

大喜多 治	(63)	自民現	多度津町	⑤
-------	------	-----	------	---

(三豊郡第一選挙区=定数4)

増田 稔	(50)	自民現	高瀬町	③
三宅暉茂	(68)	自民現	詫間町	⑤
組橋啓輔	(54)	自民現	仁尾町	⑤
篠原正憲	(52)	社会現	豊中町	③

(三豊郡第二選挙区=定数1)

篠原公七	(46)	自民現	大野原町	②
------	------	-----	------	---

六選挙区で十一人無投票

投票率アップも低水準

【第十四回県議会議員選挙】 十一年四月の香川県議会議員選挙（定数四十五）では、十五選挙区の立候補者数は前回と同じ五十九人。新旧別では、現職が最多の四十四人、元職一人、新人は過去最少だった昭和六十二年と同じ十四人とどまり、女性候補者は過去最多の四人を数えた。党派別候補者は、自民三十四人、民主一人、公明三人、共産五人、社民五人、無所属十一人。自民、公明、民主は現有議席の確保を目指し、党名を変更した社民も支持基盤の堅持を目指した。共産は、十年夏の参議院議員選挙で得票数を伸ばした勢いから、高松市選挙区で二十四年ぶりに二人の候補者を擁立した。

無投票で議席を得たのは六選挙区十一人。普通寺市選挙区（定数二）は昭和五十四年、六十二年に次いで戦後三度目、観音寺市選挙区は二十年ぶりの無投票となった。このほか、木田郡第二選挙区（定数一）、仲多度郡第二選挙区（定数二）は四回連続、三豊郡第一選挙区（定数四）と三豊郡第二選挙区（定数二）は、前回に続いての無投票となった。選挙戦となった九選挙区（定数三十四）では、子育てや環境問題など、生活に密着した公約を訴える候補者が目立った。また、身近な選挙のあり方に一石を投じようと、香川大学の学生グループが企画して、高松市選挙区に立候補した複数候補者主催の合同個人演説会が開催された。

高松市選挙区（定数十四）は、勇退議員が一人だったことから新人の出馬はわずか三人。現職組が優位に選挙戦を進め十二人が当選、元

職一人が返り咲き、新人で当選したのは檜 昭二氏（共新）だけだった。共産は、三選を目指した藤目千代子氏が次点となり、県都での複数議席獲得はならなかった。前回選挙で社会公認として再選を果たした村上 豊氏は今回、県議会で唯一の民主党公認候補として出馬、県友愛会議などの支持と個人票の掘り起こしで議席を守った。市民派の渡辺智子氏（無現）は無党派層の支持を手堅くまとめ、上位で再選を果たした。

二回連続で自民公認候補が三議席を独占した丸亀市選挙区（定数三）は、自民現職三人に連合香川、社民推薦の梶 正治氏（無新）と、土岐一郎氏（共新）が挑んだ。社民は社会党時代、この選挙区から四期連続で県議会議員を送り出しているだけに、梶氏は自民の議席独占阻止を訴え、三度目の挑戦で悲願を達成した。

豊島産廃問題で全国的に注目を集めた小豆郡選挙区（定数二）。自民現職二人の厚い壁に挑んだ石井 亨氏（無新）は、告示直前の出馬表明と知名度の低さから出遅れ感があったが、「小豆島から香川を変える」をスローガンに草の根選挙を展開、自民現職の一角を崩した。保守三つどもえとなった仲多度郡第一選挙区（定数二）は、知事選を巡る混乱から十年六月に議員辞職した都村忠弘氏の長男、都村尚志氏（無新）がトップ当選、前回選挙で初当選した五所野尾恭一氏（自現）は二期目のジंकウスに泣いた。

坂出市選挙区（定数三）は、共産が八年ぶりの議席奪還を目指して新人を擁立。危機感を募らせた自民現職の三陣営は終盤に引き締まり、着実に票を上積みして三議席を死守した。綾歌郡選挙区（定数三）では、現職、新人五人の激戦を制して大西末廣氏（自現）が県議会史上

最多の十期連続当選を果たした。

党派別の得票率は、現有議席を四減らした自民は五九・二二％で前回選挙より一・七七^ポポイントダウン、一議席を死守した民主は一・九一％、三議席確保の公明は六・三五％で前回並みの得票率だった。また、一議席を維持した共産は、高松市選挙区で二人の候補者を立てたことなどから前回より三・七八^ポポイントアップの六・九七％となった。社民は一議席増だったが、得票率は四年前の社会党時代と比べると三・七四^ポポイントダウンして七・六三％にとどまった。無所属候補の得票率は一七・九三％で、市民グループの投票行動の高まりなどから前回を三・三七^ポポイント上回った。投、開票が行われた九選挙区の平均投票率は六〇・七四％。投票時間の二時間延長や不在者投票の要件緩和などから大幅な投票率アップが期待されたが、過去最低だった前回統一選挙の五七・四〇％は上回ったものの、歴代ワースト二位に終わった。

香川県議会議員選挙

平成 11 年 4 月 11 日執行 (○の数字は当選回数)

(高松市選挙区=定数 14、候補者 17)

当	12,640 票	宮 本 欣 貞 (43)	自 民 現	西植田町	②
当	11,883 票	木 村 嘉 己 (69)	自 民 現	屋島東町	⑨
当	11,217 票	藤 本 哲 夫 (55)	社 民 元	上 之 町	⑥
当	9,632 票	渡 辺 智 子 (45)	無所属 現	多肥上町	②
当	8,305 票	高 岡 哲 夫 (73)	自 民 現	鬼 無 町	⑥
当	8,250 票	原 内 保 (56)	自 民 現	扇 町	②
当	7,892 票	寒 川 泰 博 (60)	公 明 現	鶴 市 町	③
当	7,888 票	大須賀 規 祐 (59)	公 明 現	屋島西町	④
当	7,847 票	平 木 享 (51)	自 民 現	仏生山町	②
当	7,647 票	植 田 郁 男 (67)	自 民 現	田 村 町	⑥
当	7,462 票	松 本 康 範 (52)	自 民 現	一 宮 町	③
当	7,164 票	村 上 豊 (53)	民 主 現	塩 上 町	③
当	7,162 票	鎌 田 守 恭 (50)	自 民 現	栗 林 町	③
当	7,104 票	桵 昭 二 (49)	共 産 新	木 太 町	①
	6,746 票	藤 目 千代子 (50)	共 産 新	檀 紙 町	
	5,078 票	小 河 雄 磨 (48)	無所属 新	高 松 町	
	4,299 票	坂 井 幸 博 (49)	自 民 新	円 座 町	

各種選挙（県議会議員選挙）

（丸亀市選挙区＝定数3、候補者5）

当	11,491 票	梶 正 治	(46)	無所属	新	山北町	①
当	9,474 票	山田 正 芳	(35)	自 民 現		土器町	②
当	6,903 票	塚本 修	(58)	自 民 現		金倉町	③
	6,637 票	山本 直 樹	(51)	自 民 現		新浜町	
	1,499 票	土岐 一 郎	(46)	共 産 新		土居町	

（坂出市選挙区＝定数3、候補者4）

当	10,691 票	谷川 実	(61)	自 民 現		宇多津町	⑦
当	10,390 票	尾崎 道 広	(53)	自 民 現		富士見町	③
当	7,825 票	池田 長 義	(69)	自 民 現		林田町	⑥
	6,867 票	中井 豊	(63)	共 産 新		文京町	

（大川郡選挙区＝定数5、候補者7）

当	10,758 票	真部 善 美	(77)	自 民 現		長尾町	⑤
当	9,526 票	白井 昌 幸	(61)	自 民 現		志度町	④
当	9,322 票	名和 基 延	(58)	自 民 現		津田町	②
当	8,956 票	砂川 保	(55)	社 民 現		大内町	⑤
当	8,059 票	富田 博 昭	(62)	公 明 現		大内町	③
	3,948 票	東本 栄 子	(46)	共 産 新		白鳥町	
	3,928 票	木村 作	(53)	無所属	新	白鳥町	

（小豆郡選挙区＝定数2、候補者3）

当	8,601 票	岡田 好 平	(64)	自 民 現		土庄町	⑥
当	7,340 票	石井 亨	(39)	無所属	新	土庄町	①
	6,916 票	黒島 啓	(57)	自 民 現		内海町	

（木田郡第一選挙区＝定数1、候補者2）

当	8,671 票	筒井 敏 行	(56)	自 民 現		三木町	③
	3,246 票	玉井 英 子	(52)	無所属	新	三木町	

（香川郡選挙区＝定数1、候補者2）

当	10,567 票	綾田 福 雄	(52)	自 民 現		香南町	⑤
	6,900 票	西川 勝 秀	(47)	無所属	新	香川町	

（綾歌郡選挙区＝定数3、候補者5）

当	9,629 票	水本 勝 規	(49)	自 民 現		綾南町	②
当	9,013 票	大西 末 廣	(68)	自 民 現		飯山町	⑩
当	8,476 票	亀井 広	(65)	社 民 現		国分寺町	⑤
	7,550 票	西岡 章 夫	(58)	無所属	新	国分寺町	
	2,876 票	河田 博 之	(54)	無所属	新	綾歌町	

（仲多度郡第一選挙区＝定数2、候補者3）

当	9,316 票	都村 尚 志	(34)	無所属	新	琴平町	①
当	6,658 票	栗田 隆 義	(45)	自 民 現		満濃町	③
	5,368 票	五所野尾 恭一	(53)	自 民 現		満濃町	

<無投票当選>

(善通寺市選挙区=定数2)

辻村修	(37)	自民現	上吉田町	②
櫛田治夫	(67)	社民現	弘田町	②

(観音寺市選挙区=定数2)

石川豊	(57)	自民現	吉岡町	②
岸上修	(73)	自民現	柞田町	⑤

(木田郡第二選挙区=定数1)

大西邦美	(49)	無所属現	牟礼町	⑥
------	------	------	-----	---

(仲多度郡第二選挙区=定数1)

大喜多治	(67)	自民現	多度津町	⑥
------	------	-----	------	---

(三豊郡第一選挙区=定数4)

増田稔	(54)	自民現	高瀬町	④
篠原正憲	(56)	社民現	豊中町	④
三宅暉茂	(72)	自民現	詫間町	⑥
組橋啓輔	(58)	自民現	仁尾町	⑥

(三豊郡第二選挙区=定数1)

篠原公七	(50)	自民現	大野原町	③
------	------	-----	------	---

◇…香川県議会議員補欠選挙…◇

平成10年8月30日執行(○の数字は当選回数)

(丸亀市選挙区=欠員1、候補者3)

当	11,817票	山田正芳	(35)	無所属新	土器町	①
	10,449票	大林建夫	(40)	無所属新	郡家町	
	8,387票	梶正治	(45)	無所属新	山北町	

(善通寺市選挙区=欠員1、候補者2)

当	10,293票	辻村修	(37)	自民新	上吉田町	①
	2,672票	内田信吾	(43)	共産新	善通寺町	

(仲多度郡第一選挙区=欠員1、候補者2)

当	9,181票	栗田隆義	(45)	自民元	満濃町	②
	3,143票	小山直樹	(41)	共産新	琴南町	

平成14年8月25日執行(○の数字は当選回数)

<無投票当選>

(善通寺市選挙区=欠員1)

高田良徳	(42)	社民新	木徳町	①
------	------	-----	-----	---

◆補欠選挙◆

平成七年四月から十五年三月まで、県議会議員の死去や辞職などに伴う補欠選挙は、知事選挙と合わせて十年八月に丸亀市、善通寺市、仲多度郡第一の三選挙区、十四年八月には善通寺市選挙区で行われた。

【十年八月補選】 参議院議員選挙（香川選挙区）に立候補した山内俊夫議員（自民）の辞職を受けた丸亀市選挙区の補欠選挙（欠員一）には、保守系無所属の大林建夫氏、山田正芳氏のほか、連合香川の推薦を受けた梶 正治氏が立ち、無所属新人による争いとなった。大林、山田両氏はともに自民党系で県議選への挑戦は初めて。保守層を二分する戦いに加え、自民による三議席独占阻止を掲げる梶氏が絡み合ったが、山田正芳氏が粘り強く支持を広げて初陣を制した。

辻村 衛議員（自民）の死去に伴う善通寺市選挙区（欠員一）と、都村忠弘議員（自民）の辞職を受けた仲多度郡第一選挙区（欠員一）は、両選挙区とも自共対決の構図となった。善通寺市選挙区は、死去した辻村議員の長男の辻村 修氏（自新）が大差で当選。仲多度郡第一選挙区は、七年四月の県議選で惜敗した栗田隆義氏（自元）が地元票を手堅くまとめて返り咲いた。

【十四年八月補選】 柳田治夫議員（社民）の死去を受けた善通寺市選挙区の補欠選挙（欠員一）は八月十六日告示され、元善通寺市議の高田良徳氏（社民新）以外に届け出はなく、高田氏が無投票で初の議席を得た。

第二節 知事選挙

新人四氏出馬、真鍋氏が当選 自民、社民など五党相乗り

候補者選考をめぐる自民党県連の混乱が浮き彫りになった平成十年八月の知事選挙には、元コープ香川専務理事の多田羅護治氏（無新）、弁護士を生田暉雄氏（無新）、前国際協力事業団副総裁の真鍋武紀氏（無新）、新自民、民主、自由、社民推薦、公明支持）、香川医療生協理事長の二宮 正氏（無新、共産推薦）が出馬、多くの党・団体の推薦、支持をバックに、平井県政の継承を訴えた真鍋氏が大きく制した。

今回の選挙は、二十一世紀の香川のリーダーを選ぶ重要な選挙だった。選挙期間中には、有権者の政治に対する関心と投票率アップを狙い、香川大学生らが企画、立候補者が主催する〈合同個人演説会〉が三木町で開催された。しかし、県下の平均投票率は三九・三％で前回選挙を二・四ポイント上回ったものの、知事選で初の新人四氏による選挙戦だったにもかかわらず四回連続して三〇％台と伸び悩んだ。

無所属で出馬表明した真鍋氏は、告示前から農業・漁業団体、出身高校の同窓生らへの地道な働きかけを続けた。そうした中、六月二十九日には、県内五市の保守系議員協議会が真鍋氏を支持する決議文を採択、自民党の加藤紘一幹事長も候補者の一本化を自民党県連に要請したのを受け、告示直前の七月二十八日に真鍋氏は自民、民主、自由、社民の四党並びに連合香川との間で政策協定を締結、その後、公明も支持の形で加わり、最終的には五党相乗りとなった。

県議会自民党議員会の分裂という後遺症はあったが、真鍋氏は脱イデオロギーに徹して平井県政の継承と環境問題への積極的な対応などをアピール。共産を除く多党相乗りの強みを生かし、県内四十三市町すべてを制して初陣に花を添えた。

行政の説明責任と県民本位の政治への転換を訴えたのは多田羅氏。既成政党に頼らず、ボランティアを軸にした草の根選挙で地元坂出市などを中心に既成政党への批判票を取り込んだものの及ばなかった。

共産推薦の二宮氏は、十二年ぶりの革新県政実現に向けて組織を挙げて戦いに挑んだ。しかし、得票数は七月の参議院議員選挙で同党公認候補が獲得した票の四五%にとどまり、追い風ムードを生かしきれなかった。元裁判官の生田氏は、公正な県政づくりを掲げ、街頭演説を中心として支持の拡大を図ったが浸透できなかった。

真鍋氏が大差で再選 社民、三十二年ぶり自主投票

十四年初頭の県行政は、預け金問題や牛肉の産地偽装、認可外保育所での園児死亡事件など、行政のあり方が問われる事案が相次いだ。

こうした情勢下、任期満了に伴う知事選は八月八日に告示された。

出馬したのは、会社社長の佐佐木アシユファ麻コ氏（無新）、再選を目指す真鍋武紀氏（無現）自民、民主、公明、保守推薦、前回に続く挑戦となる雑誌編集長の多田羅讓治氏（無新）の三人だった。

真鍋氏の動きは速かった。十三年十一月定例会で再出馬を正式に表明、十四年五月には自民党県連のほか、前回は支持にとどまった公明が推薦を決定、七月に入り民主党県連、告示直前には保守党も推薦を

決めた。だが、前回選挙で推薦母体となった社民党県連は、高齢者医療費助成制度の見直しや県の出先機関統廃合、職員削減などの行財政改革に反発、独自候補の擁立も検討したが実現せず、連合香川とともに自主投票となった。知事選における社民の自主投票は、社会党時代の昭和四十五年以来三十二年ぶりとなった。

多党相乗りの構図は前回の知事選挙とは異なったが、真鍋氏は万全の強みを発揮した。選挙戦では、豊島産廃の公害調停成立や行財政改革の推進などの実績を前面に、環境に優しい県土づくりなどをアピールして県内全市町で手堅く票を積み上げて二十万票を突破、前回選挙を約二万九千票上回り、再選を果たした。

多田羅氏は、告示一カ月前の七月八日に出馬を正式表明。前回選挙と同様に、ボランティアとカンパによる市民型選挙を展開する一方、県労連や共産党県委員会などで構成する（明るい民主県政をきずく県連絡会議）の推薦と、自主投票を決めた社民党系県議有志による勝手連的な支援も受けて支持の輪を広げた。得票数は前回は約二万票上回ったものの、無党派旋風は吹かなかった。

知事選初挑戦の佐佐木氏は、預け金問題に象徴される県行政の立て直しとともに、豊島産廃の早期処理などを公約に街頭演説などで支持を訴えたが及ばなかった。

県の平均投票率は三六・五〇%（前回選挙比二・八一ポイント減）となり、五回連続して四〇%台を下回るなど低落化傾向に歯止めはかからなかった。

香川県知事選挙〔○の数字は当選回数〕

平成 10 年 8 月 30 日執行

当	174,603 票	真 鍋 武 紀	(58)	無所属 新	高 松 市	①
	55,933 票	多田羅 讓 治	(48)	無所属 新	坂 出 市	
	42,131 票	二 宮 正	(66)	無所属 新	香 川 郡	
	35,019 票	生 田 暉 雄	(56)	無所属 新	高 松 市	

平成 14 年 8 月 25 日執行

当	203,747 票	真 鍋 武 紀	(62)	無所属 現	高 松 市	②
	77,527 票	多田羅 讓 治	(52)	無所属 新	坂 出 市	
	11,541 票	佐佐木アシュファ 麻コ	(35)	無所属 新	高 松 市	

<戦後の香川県知事選挙の結果> (年月日は投票日)

昭和 22 年 4 月 5 日									
当	134,709 票	増	原 恵 吉	(45)	無所属	新	高 松 市	①	
	109,917 票	大	西 一 郎	(61)	無所属	新	東 京 都		
	65,479 票	大	林 千太郎	(59)	社 会	新	綾 歌 郡		
	43,311 票	森	常 太 郎	(56)	諸 派	新	高 松 市		
昭和 25 年 9 月 11 日									
当	228,787 票	金	子 正 則	(43)	自 由	新	高 松 市	①	
	151,077 票	阿	河 準 一	(42)	無所属	新	高 松 市		
	13,596 票	中	岡 要	(38)	無所属	新	仲多度郡		
昭和 29 年 9 月 5 日									
当	272,050 票	金	子 正 則	(47)	自 由	現	高 松 市	②	
	34,518 票	清	水 省 三	(51)	共 産	新	高 松 市		
昭和 33 年 8 月 9 日 (告示日) 金子正則				(51)	(無投票当選)			③	
昭和 37 年 9 月 2 日									
当	224,621 票	金	子 正 則	(55)	自 民	現	高 松 市	④	
	50,468 票	三	好 始	(46)	無所属	新	綾 歌 郡		
	21,172 票	下	川 行 夫	(40)	共 産	新	高 松 市		
昭和 41 年 8 月 28 日									
当	242,314 票	金	子 正 則	(59)	自 民	現	高 松 市	⑤	
	147,344 票	川	下 延 次	(53)	社 会	新	善通寺市		
昭和 45 年 8 月 30 日									
当	227,749 票	金	子 正 則	(63)	自 民	現	高 松 市	⑥	
	64,241 票	平	田 清 臣	(55)	共 産	新	高 松 市		
昭和 49 年 8 月 25 日									
当	280,733 票	前	川 忠 夫	(65)	無所属	新	高 松 市	①	
	192,648 票	金	子 正 則	(67)	自 民	現	高 松 市		
	1,911 票	前	河 貢	(32)	国家社会主義労働党	新	高 松 市		
	402 票	中	岡 要	(62)	無所属	新	川 崎 市		
昭和 53 年 8 月 27 日									
当	305,163 票	前	川 忠 夫	(69)	無所属	現	高 松 市	②	
	263,520 票	大	野 功 統	(42)	自 民	新	高 松 市		
昭和 57 年 8 月 29 日									
当	303,286 票	前	川 忠 夫	(73)	無所属	現	高 松 市	③	
	236,257 票	前	田 敬 二	(65)	無所属	新	三 豊 郡		
昭和 61 年 8 月 31 日									
当	208,213 票	平	井 城 一	(63)	無所属	新	高 松 市	①	
	6,314 票	阿	部 孝	(60)	無所属	新	香 川 郡		
平成 2 年 8 月 26 日									
当	229,661 票	平	井 城 一	(67)	無所属	現	高 松 市	②	
	30,560 票	田	村 守 男	(40)	共 産	新	高 松 市		
平成 6 年 8 月 28 日									
当	224,286 票	平	井 城 一	(71)	無所属	現	高 松 市	③	
	59,626 票	梶	義 照	(53)	無所属	新	高 松 市		

第三節 市長選挙

平成七年四月からの八年間、高松、丸亀の両市長選が統一地方選挙として施行されたほか、坂出、善通寺、観音寺の三市と十四年四月に県内六番目の市として誕生した（さぬき市）で初めての市長選が行われた。このうち、丸亀市長選は七年と十一年、善通寺市長選は十年、十四年と連続して現職が無投票で当選を決めた。また、十一年四月の高松市長選も現職以外に立候補者がなく、昭和二十六年以来四十八年ぶりに無投票となった。さらに、十一年五月の観音寺市長選も、昭和五十四年以来二十年ぶりに無投票に終わった。こうした傾向に対して学識経験者やマスメディアの多くは、投票率の低迷とともに、〈投票もない信任〉として警鐘を鳴らした。

◇◇高松市長選◇◇

自共推薦の増田氏当選

七年四月の市長選挙は、無所属新人同士の争い。前高松市助役の増田昌三氏（無新Ⅱ自民、共産推薦）と前県議の藤本哲夫氏（無新Ⅱ新進、社会、さきがけ推薦）の異例の対決が全国的に注目されたが、増田氏が、自共共闘批判をかわして初当選を果たした。

市長選に立候補したのは、増田、藤本両氏のほか、政治団体代表の鹿島日出喜氏（無新）、会社経営の太田英章氏（無新）の四人。

増田氏は、六年十二月に高松市助役を退任して出馬を表明。脇市長

の後継を掲げ、自民、共産両党と市議会最大会派の同志会などの推薦を取りつけ、選挙戦に挑んだ。

自共相乗りの構図に批判もあった。だが、増田氏は選挙戦で三十年間の行政経験と脇市政の安定的継続などを訴え、保守層や共産の固定票を手堅くまとめ、自主投票の公明支持者や無党派層の票も取り込み、藤本氏に約二万二千票差をつけて圧勝した。

藤本氏は六年十月、社会党を離党して無所属での出馬を表明。〈脇市政からの脱却〉をスローガンに、市民参加の市政、市役所改革などを掲げて挑んだが、社会、連合を軸とした従来型の組織依存型選挙から踏み出すことができず、支持の輪を広げることではできなかった。

脇市政時代に続き、四度目の市長選挑戦となった太田氏は、市民党の立場で市政改革を訴える草の根選挙に徹した。知名度も高く、一部保守層の票を取り込むなど健闘したが、組織の厚い壁を崩すことはできなかった。鹿島氏は、街頭活動を中心に独自の戦いを挑んだ。

四十八年ぶり無投票、増田氏再選

中核市移行後初めての市長選は十一年四月十八日に告示され、増田昌三氏（無新）以外に届け出はなく無投票で再選を果たした。

全国的に異例の自民、共産両党の推薦を受けて七年四月に市長ポストに就いた増田氏は十年九月に再出馬を表明。前回選挙とはスタンスを変え、どの既成政党からも推薦を受けない市民党の立場で臨む考えを示したうえで、議会対策として市議会全会派に推薦を申し入れた。要請を受けた会派のうち保守系の同志会が政策協定を結んだが、前回選挙で推薦した共産は「開発優先の姿勢が目立つ」と反発、脇前市長

時代から七期二十八年間にわたって続いた市長与党から野党に転じたものの、独自候補の擁立は断念した。また、社民、民主系議員らで組織する〈市民フォーラム21〉と公明の両会派も、会派としての推薦は見送った。

無投票で再選を果たした増田氏は、サンポート高松の早期完成とともに、周辺自治体との合併による〈五十万都市構想〉の実現に独自色を出して取り組むとの決意を示した。

◇◇丸亀市長選◇◇

片山氏が無投票再選

新人同士の接戦を制して平成三年四月に県議会議員から市長ポストに転じた片山圭之氏（無現）にとって、一期四年間の行政手腕を問う選挙は七年四月に告示された。片山氏は、県議時代に培った太いパイプと企画力を生かして四年間にわたって市政を運営。二十一世紀における中讃の拠点都市としての機能整備とともに、文化、福祉、教育の充実などの施策も評価され、無投票での再選が決まった。

連続無投票は市政初

現職の片山圭之氏が、十年十二月に三選出馬を正式に表明。過去二回は自民の推薦を受けての出馬だったが、今回は「党派にとらわれず、広く住民の声を聞きたい」として自民への推薦依頼は行わず、ごみ焼却施設〈グリーンピア丸亀〉の整備など八年間の実績をアピールする

とともに、市民党の立場を強調した。当初は、前年夏の県議補選に絡んで対立候補擁立の動きがあったが、片山氏が無投票で三選を果たした。丸亀市長選の二期連続無投票は初めてだった。

三選された片山氏は、厳しい財政環境を踏まえ、ハコ物行政から脱皮してソフト面重視の施策を推進する考えを示した。

◇◇坂出市長選◇◇

八年ぶり選挙戦、松浦氏三選

平成五年の前回選挙で無投票だった松浦稔明氏（無現）が九年五月、八年ぶりの選挙戦の結果、共産党県委員会副委員長の野角満昭氏（共新）、保険代理店経営の筒井勝雄氏（無新）の挑戦を退け三選を果たした。投票率は四七・〇七％。松浦氏が初当選した八年前の七六・四三％を大幅に下回り、同市長選ではワースト三位だった。

松浦氏は、〈市民優先、市民公平〉を基本理念に、市民党の立場を掲げ、行財政改革への取り組みのほか、財政安定化のための企業誘致、坂出駅前周辺整備事業の推進などを訴えた。人口減少や中心市街地の低迷などを踏まえて市政の変革を訴えた初挑戦の野角氏は、立ち遅れから浸透を図ることができなかった。筒井氏も、草の根選挙で独自の戦いを挑んだが届かなかった。

現職の松浦氏四選

十三年五月十三日に投、開票が行われ、松浦稔明氏（無現）が、い

ずれも無所属新人の水尾一二氏、細川雅生氏に圧勝して四選を果たした。

選挙戦で松浦氏は、小学校単位で組織した後援会での集会や企業訪問で支持基盤を固め、三期十二年の実績とともに、坂出駅南での土地区画整理事業など中心市街地の活性化策を訴えたほか、下水道整備にも重点を置く考えを示して支持を広げた。新顔二人のうち細川氏は街頭活動をしなかったが、水尾氏は、ボランティアとともに市制の刷新などを地道に呼び掛けたが、訴えは実らなかった。

◇◇さぬき市長選◇◇

赤澤氏が初代市長に

十四年四月に県内六番目に市制施行したさぬき市の市長選挙は、同年五月十三日に投、開票が行われ、前志度町長の赤澤申也氏（無新）が初代市長に就任した。

初めての市長選には、赤澤氏のほかに十川昭五氏（無新）、広瀬正美氏（無新）、新田秀雄氏（無新）が立候補、十川氏は前大川町長、広瀬氏は前寒川町長、新田氏は志度町議会副議長を務めており、選挙戦は旧町対決の構図となった。

赤澤氏は、徹底した情報公開や小学校校区ごとに福祉の拠点施設整備などを公約に、新庁舎の建設では審議会を組織して検討を進める考えを示唆、旧志度町の有権者は全市の約四割を占めるという数的優位も追い風となった。大川町長を四期務めた十川氏は、前長尾町長、津田

町長らの支援を受けたが浸透せず、広瀬氏、新田氏もＩＴを活用した医療や地域福祉の充実などを訴えたが、支持の輪を他町へ広げることができなかった。

◇◇観音寺市長選◇◇

白川氏、現職破り当選

任期満了に伴う市長選が七年六月に行われ、県議会議員から転身した白川晴司氏（無新）と今津禮二郎氏（無現）の一騎打ちとなり、白川氏が約九千票の差をつけて初当選した。

白川氏は、昭和六十二年四月に県議会議員に初当選したが、地元である観音寺市政の長引く混乱を憂慮して二期八年で勇退、市政の刷新と財政立て直しなどを公約に、七年一月に市長選への出馬を正式表明した。

選挙戦では、「最重要課題は財政再建」と訴えたうえで、三豊干拓地を活用した企業誘致や観音寺新港の整備、建設残土による埋め立て事業などの構想をアピール。加えて、観音寺のソフトイメージとして〈音を観る街〉としてイメージできるような文化都市づくり構想にも意欲をのぞかせ、世代を超えて支持の輪を広げた。

今津氏は、前市長との一騎打ちを制して三年一月に市長に就任。しかし、議会の不信任決議によって在任九十七日間で失職、混戦もようとなった出直し選挙で再び市長職に返り咲き、六年十二月定例会で出馬を表明して選挙戦に臨んだが、三選はかなわなかった。

白川氏が無投票再選

観音寺市初の市長・市議ダブル選挙として十一年五月二十三日に告示された。市長選には、再選を目指す白川晴司氏（無現）以外に届け出はなく、無投票で再選を果たした。同市にとっては、昭和五十四年以来二十四年ぶりの無投票だった。

再挑戦に当たって白川氏は、政党の公認、推薦を受けない市民党としての立場を強調したうえで、競輪事業の急激な落ち込みなどから厳しさを増す財政運営の抜本的な改革など一期四年の実績をアピール、〈やさしさと元気づくりのまちづくり〉をスローガンに、支援の輪を広げた。無投票で再選を決めた白川氏は、競輪事業から脱却した財政の実現や産業団地への企業誘致、老朽化した火葬場の建設などに鋭意取り組むとの方針を示した。

◇◇善通寺市長選◇◇

八年ぶりに無投票

任期満了に伴い十年四月十二日に告示され、宮下 裕氏（無現）以外に届け出はなく、無投票で再選が決まった。同市長選の無投票は八年ぶり。

宮下氏は、九年九月定例会で早々と再出馬を表明、二期目の公約としてリサイクル文化都市の創造や、ボランティアによる在宅介護の完全実施などを掲げた。しかし、前回の保守同士の激しい戦いとは対照

的に、徹底した行財政改革や下水道整備など一期四年間の実績が評価され、無投票の公算が当初から強かった。

宮下氏、二期連続無投票

十四年四月十四日の告示日に三選を目指す宮下 裕氏（無現）以外に立候補者はなく、宮下氏が三選を果たした。同市長選での二期連続無投票は、昭和二十九年の市制施行後で初めてだった。

宮下氏は、十三年十二月定例会で出馬を正式に表明。十四年三月には、自民党善通寺支部が宮下氏の支持を決めた。三選を果たした宮下氏は、二期八年間で手掛けた職員定数の削減による徹底した行財政改革や社会基盤整備などに向け、一層の行政の効率化を目指す考えを示すとともに、市の将来像として〈快適な居住空間の創造〉を挙げ、教育環境や農地環境の保全に積極的に取り組む考えを示した。

市 長 選 挙

〔年月日は投票日
○の数字は当選回数〕

高松市長選挙

平成7年4月23日						
当	76,505 票	増 田 昌 三 (52)	無所属	新	①	
	54,429 票	藤 本 哲 夫 (51)	無所属	新		
	13,290 票	太 田 英 章 (62)	無所属	新		
	1,610 票	鹿 島 日出喜 (50)	無所属	新		
平成11年4月18日(告示日)		増 田 昌 三 (56)	(無投票当選)		②	

丸亀市長選挙

平成7年4月16日(告示日)	片 山 圭 之 (53)	(無投票当選)	②
平成11年4月18日(告示日)	片 山 圭 之 (57)	(無投票当選)	③

坂出市長選挙

平成9年5月18日						
当	17,409 票	松 浦 稔 明 (58)	無所属	現	③	
	4,245 票	野 角 満 昭 (53)	共 産	新		
	1,014 票	筒 井 勝 雄 (52)	無所属	新		
平成13年5月13日						
当	17,362 票	松 浦 稔 明 (62)	無所属	現	④	
	6,876 票	水 尾 一 二 (54)	無所属	新		
	314 票	細 川 雅 生 (47)	無所属	新		

善通寺市長選挙

平成10年4月12日(告示日)	宮 下 裕 (61)	(無投票当選)	②
平成14年4月14日(告示日)	宮 下 裕 (65)	(無投票当選)	③

観音寺市長選挙

平成7年6月4日						
当	16,854 票	白 川 晴 司 (49)	無所属	新	①	
	7,879 票	今 津 禮二郎 (61)	無所属	現		
平成11年5月23日(告示日)		白 川 晴 司 (53)	(無投票当選)		②	

さぬき市長選挙

平成14年5月12日						
当	14,315 票	赤 澤 申 也 (54)	無所属	新	①	
	10,563 票	十 川 昭 五 (71)	無所属	新		
	7,077 票	広 瀬 正 美 (65)	無所属	新		
	1,575 票	新 田 秀 雄 (64)	無所属	新		

県内の市長・町長（平成15年1月現在）

高松市	増田	田山	昌圭	三之	牟礼	礼治	町中	山梶	畑河	喜正	久孝	夫弘	満濃	町平	森山	照正	市臣
丸亀市	片松	山浦	稔	明裕	庵江	塩川	吉谷	梶中	河井	正保	孝弘	久男	琴平	町津	山小	下國	宏和
坂出市	宮白	下川	晴	司也	香南	香島	濱上	中吉	本	輝孝	男夫	高瀬	多度	町南	小千	葉川	昭男
普通寺市	赤安	澤倍	正耕	典市	直島	綾上	南町	谷濱	田安	孝賢	夫正	山本	仲南	町高	前大	橋田	良定
観音寺市	久中	野條	弘一	矩郎	綾南	綾南	町歌	福二	井井	則正	賢史	大野	高瀬	町本	倉平	野田	宣清
さぬき市	坂三	木木	佑二	一郎	綾南	綾南	町歌	新谷	井井	光	國夫	豊中	山本	町高	藤横	山地	繁始
引田町	八石	原	壮	收	飯宇	飯宇	多津	谷稻	川毛	義	実典	仁尾	山本	町高	高	原西	宏美
白鳥町					宇南	宇南	町南	稲	毛			財	田	町	大		剛
大内町																	
内海町																	
土庄町																	
池田町																	
三木町																	

第四節 国政選挙

新党ブームで再編加速

参院選敗退の橋本首相退陣

平成七年四月から十五年三月までの八年間で、衆参合わせて五回の国政選挙が行われた。

（五十五年体制）崩壊に伴う連立政権下、八年十月の第四十一回総選挙では、小選挙区比例代表並立制が初めて導入された。また、森政権下の十二年六月総選挙では、自公保の連立与党が六十議席減らしたものの安定多数を確保した一方、新進党解党後に創設された新党の民主党が百二十四議席を確保して野党第一党となった。

阪神淡路大震災後の七年七月の第十七回参院選では、自社さの村山政権与党が過半数を維持したものの、社会は過去最低の十六議席しか得られなかった。さらに、自民単独の橋本政権下での第十八回参院選では自民が大敗を喫し、橋本首相が責任を取って退陣。一方で、新党の民主とともに共産も躍進。十三年七月の第十九回参院選は、小泉人氣に乗った自民が都市部でも票を伸ばし、選挙区、比例区合わせて六十五議席を獲得、非改選の四十六議席と合わせて百一十一議席となり、連立を組む公明、保守と合わせて百四十議席となった。

国政レベルでの政界再編の動きは、県内の政情にも一部影響した。七年の参院選香川選挙区は、中央で連立を組む自民元職と社会前職の与党対決となり、自民公認の真鍋賢二氏が返り咲いた。この選挙で新進党は、全国公募した女性候補を擁立した。労相などを務めた平井卓志氏（自由）が勇退した十年の参院選では、県議から転身の山内俊夫

氏（自新）が社民、共産など新人同士の争いを制して初陣を飾った。また、小泉政権下で初めての国政選挙となった十三年の第十九回参院選では、自民前職の真鍋賢二氏が現職の強みを発揮した。

一方、八年の総選挙では新進が香川一区、同三区で初めての候補者を擁立したが、自民現職の壁を打ち崩すことはできなかった。十二年の総選挙は、前回と同じ戦いの構図となった香川一区で平井卓也氏（無新）が、厚相、農相などを務めた藤本孝雄氏（自前）の十一選を阻止した。

◆第四十二回総選挙

自民が小選挙区独占

初めて小選挙区比例代表並立制が導入された第四十二回総選挙は八年十月八日に公示され、香川一区五人、同二区二人、同三区四人が出馬、自民が三議席を独占し、比例単独候補として比例四国ブロックに回った森田 一氏（自前）が六回目の当選を決めた。社民は、連立政権への参画をめぐる党内の亀裂から、戦後、香川県内で守り続けてきた議席を失うなど党の存亡が問われる選挙となった。共産は議席獲得こそかなわなかったが、香川県内の三選挙区合わせた獲得票は四万四千票を上回り、四国の比例区での議席獲得につなげた。

選挙区別では、香川一区は閣僚経験のある藤本孝雄氏（自前）に平井卓也氏（新進新）、加藤繁秋氏（社元）、真鍋光広氏（民主元）、河村 整氏（共新）が挑んだ。事実上は藤本、平井両氏の一騎打ちとなったが、出遅れ感のあった藤本氏が強固な保守地盤に支えられて票を積み上げ、十選を果たした。平井氏は七年四月に出馬表明して以来、ミ

二集会や街頭から郷土再生にかける思いを訴え続けてきたが、中盤以降、系列議員、企業・団体の引き締めを図った自民の組織力に屈した。返り咲きを目指した真鍋氏は、一部労組の支援活動や菅、鳩山両代表の相次ぐ来県で追い上げを図ったが、当選ラインには届かなかった。

二区は、木村義雄氏（自前）と松村 久氏（共新）の自共対決となったが、木村氏が危なげなく四選。多党化時代の中にあって、有権者の選肢は狭く、投票率も五二・三六%にとどまり、激戦もようだった香川一区とは対照的だった。

三区は、大野功統氏（自前）と月原茂皓氏（新進前）、奥田研二氏（社新）、中谷浩一氏（共新）の争い。小選挙区導入による初の選挙戦だけに未知数の部分もあったが、大野氏は、比例四国ブロックで出馬した森田 一氏との二人三脚で、月原氏の迫撃を振り切って四期連続当選を果たした。月原氏は、あえて比例四国ブロックとの重複立候補を辞退、自らをがけつぷちに追い込み、小選挙区一本で勝負をかけたが及ばなかった。

◆第四十三回総選挙

自民の議席独占崩れる

二十一世紀の政治的潮流を占う国政選挙として十二年六月に施行され、一区は、前回総選挙で新進党から出馬して次点に泣いた平井卓也氏（無新）が藤本孝雄氏（自前）との一騎打ちを制した。二区は木村義雄氏（自前）、三区は大野功統氏（自前）が、共に危なげなく五選を果たした。また、比例四国ブロックでは、森田 一氏（自前）が七選を決めた。

平井氏は、前回選挙後からいち早く後援会組織を立ち上げ、若さを前面にミ二集会や街頭演説で支持基盤の拡大に努め、大差で雪辱を果たした。十一度目の当選を目指した藤本氏は、党幹部らの応援や組織の引き締めで猛追したが、連立政権を組む公明が自主投票に回ったことなどが大きく響いた。

一方、反自民包囲網で挑んだ二区の実鍋光広氏（民主元）、一区の加藤繁秋氏（社元）、三区の奥田研二氏（社新）は連合香川の推薦などを受けたが、すみ分け効果を発揮することはできず、真鍋氏は重複立候補した比例でも惜敗率で届かなかった。共産は三選挙区に候補者を擁立して、合わせて四万七千票を獲得、前回総選挙より約三千票上積みした。

◇平成七年参議院議員選挙

真鍋氏が雪辱果たす

村山政権下で初となる国政選挙として、七年七月二十三日に投、開票があり、六年前の雪辱を期した真鍋賢二氏（自元）が、喜岡 淳氏（社前）、稲辺富実代氏（新進新）公明推薦、山本 繁氏（共新）の現職、新人組を抑え、六年ぶりに返り咲きを果たした。

消費税問題で議席を失った真鍋氏にとっては、苦節六年の日々だった。村山政権で連立を組む社会現職との一騎打ちというねじれ選挙だったが、次期総選挙の前哨戦と位置づけ、県内各選挙区の立候補予定者と連携を図り、前回選挙で他党に流れた消費税反対の票を丹念に呼び戻すとともに、厚い保守地盤と組織力、六年前の同情票も集めて現職の喜岡氏に圧勝、三回目の当選を果たした。しかし、得票数は六

年前より約五万三千票少なく、参院選香川選挙区の自民党候補者としては、昭和四十六年以来初めて二十万票を下回った。

逆風下で真価が問われた喜岡氏は、環境政務次官など六年間の実績を前面に攻めの選挙に徹した。しかし、連立政権をめぐる党内の混乱などから労組系の動きが鈍く、得票数を前回から大きく減らして敗退、党基盤の弱体化が一段と浮き彫りとなり、四国で唯一の参院議席の死守もかなわなかった。

新進新人の稲辺氏は全国公募で選ばれ、告示直前に出馬を表明した。香川とのつながりは薄かったが、七年一月に発足したばかりの新進党県連にとって国政選挙では初の公認候補とあって、党内組織や団体、公明香川などが支持基盤の拡大に努めた。だが、県外出身というハンディと立ち遅れを跳ね返すことはできなかった。

二度目の挑戦となった山本氏は、比例選挙とセットで支持基盤の拡大を図った。地元三木町などで善戦したが、オール与党批判が票につながらず、党勢拡大には繋がらなかった。

県内の平均投票率は四六・七九%と史上初めて五〇%を切り、過去最低だった前回四年の参院選をさらに七・〇一^{ポイント}下回った。

◇平成十年参議院議員選挙

新人同士の争い、山内氏当選

十年六月二十五日に公示され、新人同士の二十四年ぶりの争いとなった香川選挙区では、県議から転身した山内俊夫氏（自新）が、加藤繁秋氏（社新）、白川容子氏（共新）、前田清貴氏（自連新）を制して初陣を飾った。

山内氏は、九年九月に早々と自民党公認を取りつけたが、知事選候補者選びをめぐる自民党県連の騒動の中での選挙戦となった。このため、組織としての選挙運動は盛り上がりを欠いたが、厚い保守地盤を背景に危なげなく当選した。しかし、得票数は二十万票に届かなかった。

加藤氏は、反自民・非共産の受け皿となる無党派層の一部に食い込み、知名度の高さもあって前回参院選で旧社会党候補が獲得した票数を約一万票上回った。しかし、連合の推薦が得られず、労組票や団体への十分な浸透ができなかったほか、自社さ連立政権に参画していたというマイナスイメージを払しょくできず、当選ラインに届かなかった。

共産新人の白川氏は、九年ぶりの党公認女性候補として自民の批判票をすくい上げ、前回参院選の共産票を一気に五倍強に増やすなど善戦したが及ばなかった。前田氏は医療改革による消費税撤廃などを掲げ、比例代表選挙とセットの運動を展開、公示直前の出馬表明だったが、保守票を中心に二万四千票余と健闘した。

香川選挙区の平均投票率は五四・五一％。新人同士の争いに加え、投票時間の二時間延長や不在者投票の要件緩和などから前回参院選を約八ポイント上回った。

◇平成十三年参議院議員選挙

自民、衆参五議席を独占

二十一世紀最初の国政選挙として、小泉構造改革を最大の争点に十三年七月二十九日に投、開票が行われた。香川選挙区は、元環境庁長

官の真鍋賢二氏（自前Ⅱ公明、保守推薦）が三人の女性新人候補を寄せつけず大差で四選を決め、県内の衆参五議席は再び自民が独占した。真鍋氏は、三期十八年の実績を踏まえ、自民支持層を固めた。選挙戦では小泉改革の推進を掲げて無党派層にも食い込み、第十七回参院選での自らの獲得票を十万票近く上回った。

名倉美登里氏（無新Ⅱ民主、社民、自由、無所属の会推薦）は、民主、社民両党の支持基盤である連合香川の支持を得て、自民批判票の取り込みを図ったが、知名度不足などから及ばなかった。

三年前の参院選で、共産公認候補として九万票余を獲得した白川容子氏（共新）は、生活者の視点で消費税減税を柱とした景気対策でアピール。共産支持層に加え、独自の戦術で自民批判票の取り込みも図ったが前回得票数を約三万二千票下回り及ばなかった。公示直前に出馬表明した田中見依氏（自由連新）は、比例四国ブロックとのセットで票の上積みを目指し、党の主要施策である医療改革を訴えたが届かなかった。

県下の平均投票率は五四・〇％。小泉人気で政治への国民の関心が高まったことに加え、投票時間の延長や今回から導入した非拘束名簿式などから投票率の大幅アップも期待されたが、前回選挙の五四・五一％を〇・五ポイント下回った。

衆議院議員総選挙

(○の数字は当選回数)

平成 8 年 10 月 20 日執行

◇…1 区…◇ (定数 1、候補者 5)

当	62,612 票	藤 本 孝 雄 (65)	自 民 前	高 松 市	⑩
	55,578 票	平 井 卓 也 (38)	新 進 新	高 松 市	
	31,501 票	真 鍋 光 広 (56)	民 主 元	高 松 市	
	12,964 票	加 藤 繁 秋 (49)	社 民 元	高 松 市	
	9,737 票	河 村 整 (37)	共 産 新	高 松 市	

◇…2 区…◇ (定数 1、候補者 2)

当	98,531 票	木 村 義 雄 (48)	自 民 前	大 川 郡	④
	26,658 票	松 村 久 (56)	共 産 新	綾 歌 郡	

◇…3 区…◇ (定数 1、候補者 4)

当	79,870 票	大 野 功 統 (61)	自 民 前	三 豊 郡	④
	62,468 票	月 原 茂 皓 (61)	新 進 前	観 音 寺 市	
	13,026 票	奥 田 研 二 (51)	社 民 新	三 豊 郡	
	7,917 票	中 谷 浩 一 (35)	共 産 新	綾 歌 郡	

◇…比例代表四国選挙区…◇

当	森 田 一 (62)	自 民 前	観 音 寺 市	⑥
---	------------	-------	---------	---

平成 12 年 6 月 25 日執行

◇…1 区…◇ (定数 1、候補者 4)

当	85,578 票	平 井 卓 也 (42)	無所属	新	高 松 市	①
	62,065 票	藤 本 孝 雄 (69)	自 民 前	高 松 市		
	27,733 票	加 藤 繁 秋 (53)	社 民 元	高 松 市		
	12,667 票	松 原 昭 夫 (44)	共 産 新	高 松 市		

◇…2 区…◇ (定数 1、候補者 4)

当	84,030 票	木 村 義 雄 (52)	自 民 前	大 川 郡	⑤
	53,015 票	真 鍋 光 広 (60)	民 主 元	綾 歌 郡	
	11,532 票	松 村 久 (59)	共 産 新	綾 歌 郡	
	8,265 票	猪 塚 武 (32)	無所属	香 川 郡	

◇…3 区…◇ (定数 1、候補者 3)

当	90,690 票	大 野 功 統 (64)	自 民 前	三 豊 郡	⑤
	37,759 票	奥 田 研 二 (55)	社 民 新	三 豊 郡	
	22,887 票	白 川 容 子 (34)	共 産 新	仲 多 度 郡	

◇…比例代表四国選挙区…◇

当	森 田 一 (66)	自 民 前	観 音 寺 市	⑦
---	------------	-------	---------	---

参議院議員通常選挙

（○の数字は当選回数）

平成 7 年 7 月 23 日執行

（定数 1、候補者 4）

当	163,817 票	真鍋賢二 (60)	自民元	高松市	③
	105,478 票	喜岡淳 (42)	社会前	高松市	
	76,982 票	稲辺富実代 (33)	新進新	高松市	
	17,395 票	山本繁 (62)	共産新	木田郡	

平成 10 年 7 月 12 日執行

（定数 1、候補者 4）

当	178,987 票	山内俊夫 (51)	自民新	丸亀市	①
	115,541 票	加藤繁秋 (51)	社民新	高松市	
	92,205 票	白川容子 (32)	共産新	仲多度郡	
	24,440 票	前田清貴 (45)	自由連合	高松市	

平成 13 年 7 月 29 日執行

（定数 1、候補者 4）

当	263,814 票	真鍋賢二 (66)	自民前	高松市	④
	80,183 票	名倉美登里 (58)	無所属新	大川郡	
	60,468 票	白川容子 (35)	共産新	仲多度郡	
	20,648 票	田中見依 (33)	自由連合	横浜市	